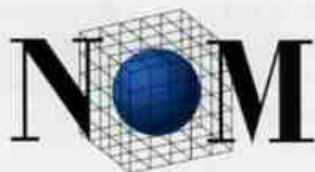


新潟県立近代美術館だより

雪 椿 通 信



アルフレッド・ブーシェ（朝顔）
1896年頃 高さ68cm 大理石
Alfred BOUCHER, Volubilis

野に咲く花のように清らかな少女の姿が、白大理石の中から浮かび上がるように彫られています。カミーユ・クローデルの最初の師ブーシェ（1850～1934）の代表作です。この作品、実は当館では最近まで〈平安の寓意〉という題名で紹介していました。作品発表時の原題が判明したので訂正したのですが、どちらの題も19世紀末の象徴性を表す点では共通しています。ブーシェにはこれと似た墓碑があるため後に誰かが「平安」と名付けたのでしょうか。この半身像は、作家の生前に少なくとも15点程作られたことが確認されています。夢見るように甘美な女性の表情と、一見未完成かと見まがう荒々しい石塊が対照的で印象を突く点も、その高い人気の理由の一つかも知れません。



ケーテ・コルヴィッツ展 ―未来の種たちへ―

2005年9月3日(土)～10月23日(日)

1867年にドイツ北東部の古都で生まれたケーテ・コルヴィッツの生涯は、自国の近代史にびたりと重なります。すなわち、遅れてきた近代国家として世界史に現れ、2つの世界大戦で完膚なきまでに敗れたドイツ第2、第3帝国の時代を、彼女は生きたのでした。少女の頃から画才を示したコルヴィッツは、家族の理解も得て、当時まだ女性には限られていた教育環境の中、素描・版画に天賦の才を発揮しました。初期の銅版画時代から高い評価を受けていましたが、その迫力に満ちた素描力は、評価の対象となると同時に、時には目を背けられる原因にもなりました。コルヴィッツが表現しようとしたのは現実に生きる人間の生活そのものであり、その中には貧困や死など、一般には表現されないような題材も含まれていたからです。

第一次大戦に志願した次男ペーターの戦死は、コルヴィッツの芸術に、更なる転機を与えました。「子どもを守る」というテーマは、もはや画題ではなく、彼女の心に刻み込まれた血肉の声となりました。1918年、なお軍隊への志願を促す風潮に対し、コルヴィッツはゲーテの言葉を引用し、これ以上「種を粉に挽いてはならない」と反論します。この言葉は、その後のコルヴィッツ芸術に一貫する大きなテーマとなり、晩年の、遺言的なリトグラフ作品に至るまで、幾たびも繰り返し表わされることとなります。

また、息子の死をきっかけにコルヴィッツは「追悼彫刻」の制作を決意します。彼女はフランス滞在時には技法を学び、ロダ

ンに面会するなど、早くから彫刻制作に関心を寄せ、自分のアトリエを持てるようになった40代には実制作も試み始めていました。そこに明瞭な目的意識と使命感が与えられ、版画に匹敵する強い意志をもって彫刻に取り組むようになります。彫刻制作は、版画の表現にも質的な変化を与え、画面からは物語的・説明的な要素が削ぎ落とされ、本質に迫るような造形を特徴とする木版画が次々と生み出されることになりました。

1933年1月ヒトラーが首相選に勝利すると、芸術家を取り巻く環境は一変します。コルヴィッツは女性初のプロイセン芸術アカデミーの会員で、1928年からは版画室長でもありましたが、早々にアカデミーからの退会・辞職に追い込まれます。作品の発表も次第に困難になりますが、「死」を主題にした石版連作や小型の彫刻群など、制作の手を止めることはありませんでした。老いの日々の中、第二次大戦では孫を失い、戦争末期にはベルリンの住居も爆撃を受けます。疎開先でコルヴィッツが77年の生涯を閉じるのは1945年4月。ドイツ降伏のわずか半月ほど前でした。

現在、ベルリンの戦没者追悼所には、拡大されたコルヴィッツの《ピエタ》像が置かれています。戦後60年。彼女が世を去って60年。しかしその芸術は色褪せず、力強い作品の数々は、「種を粉に挽くな」という祈りと共に私たちの手に託されています。
(主任学芸員 佐々木奈美子)

戦後60年特別企画 昭和の美術 1945年まで―〈目的芸術〉の軌跡

2005年11月3日(木・祝)～12月11日(日)

只今、準備中、そして早すぎる回顧？

戦後60年となる今年は、新聞やテレビをはじめとして「昭和」を振り返る企画が数多く見られます。この展覧会もそうした風潮に沿うものではありませんが、またそれは偶然の一致でもありません。展覧会の企画が曲がりなりにもスタートした3年前には、実のところ「戦後60年」という視点は企画者の頭の中には微塵もありませんでした。しかしながら、それから現在にいたるまで不思議な因縁でもあるかのように、いろいろな場面でこの時間的節目・経過に繋がっていくような感を抱くようになりました。そのひとつひとつを具体的に説明することは難しいのですが、10年前の「戦後50年」時に感じた仰々しいまでの昭和回顧キャンペーンとは異なる、個々がそれぞれに過去を振り返る気運のようなものが、かたちこそ違えそれなりに広く人々のなかに生じつつあるかのような感触を微かながらも覚えるからです。確かにそれは、マスコミを主体とする様々なきっかけに誘因されているのかもしれませんが、例えば作品の所蔵家の方々との借用にむけたちょっとした会話からも何度か感じるがありました。もっとも、それは確信といえるほどのものではありませんし、単に当事者的で個人的な思い過ごしにすぎないのかもしれませんが。

とここまで書いておきながら、これってすでにやり終えた展覧会を回顧するような文だな、とふと我に返りつつ、でも状況

は間違いなく現在進行形であり、よって回顧とは異質な心のはたらき、いわば予感とでも形容したらよいでしょうか。いずれにせよ、今回の展覧会では、戦前から戦中という激動の時代美術の一端を、できるだけ戦後60年を経た視点で見つめ直し、それを実作品と資料を通して提示できればと構想しています。その「戦後60年を経た視点」がどのようなものかは、決して開催者が断定的に提示するものではなく、むしろ展覧会を観るひとりひとりがそれをどう評価するかということであり、それはつまり観覧者自身が戦後60年の視点を自己確認する作業でもあります。言い換えれば、開催者の視点の正否は観覧者如何ということでもあり、またそれが一律でないことも十分に承知しつつ、作品が開催者の視点を離れたひとつのモノとして、会場で実際に観覧者が接する時に各々が何を感じ考えるのか、本当はそのことの方がずっと大切なことであるように思えます。また、この展覧会がそのような機会となってくれることを願っています。

実のところ、このような密かで大それた期待と希望とが実現するか否かは、先ほどの企画者の勝手な「予感」が現実のものであるかどうかという点にかかっているといっても過言ではありません。なかば押しつけられた昭和回顧志向ではなく、個々がそれぞれに過去を振り返るような気運が少しでも広く人々のなかに生じつつあるのだとしたら、展覧会が観覧者の心に何かしらの跡を残すことになるかと信じています。そうなる



① 《目撃にじられし者たち》劇術画 1900年初め



④ 《「種を彩に染めてはならない」》リトグラフ 1941年末



② 《白濁像》木版画 1922年



③ 《ピエタ》ブロンズ 1937/38年

「日本におけるドイツ2005/2006」参加事業

①、②、③ KÄTHE-KOLLWITZ-MUSEUM BERLIN
 ④ Institut für Auslandsbeziehungen e.V., Stuttgart / Fotograf Friedrich Rosenstel, Köln

ためにも、この「戦後60年」という時間の存在を展覧会を通して確かめたくもあり、またひょっとするとその予感とやがて確信に変わるやもしれません。

(主任学芸員 澤田佳三)



奇島貞志《コムソルカ》1930年、板橋区立美術館蔵



福田豊四郎《運下傘》1943年、秋田県立近代美術館蔵



引下修三《二千六百年を舞う》1942年
 新潟県立近代美術館、万代美術館蔵

■観覧料 (コルヴィッツ展・昭和の美術展とも同一料金)

	一般	大学・高校生	中・小学生
当日券	800円	600円	400円
団体券	650円	500円	300円
前売券	600円	400円	—

※団体券は20名様以上 ※中・小学生は、土・日・祝日は無料

離陸 着陸 亀倉雄策のデザイン 残された資料・遺品より

2006年1月28日(土)～3月21日(火・祝)

亀倉雄策(1915～1997)は、東京オリンピックのマーク、ポスターやNTTのマーク、大阪万博EXPO'70のポスターなどを制作した戦後のグラフィックデザイン界を代表するデザイナーです。当館には生前、その年に制作されたポスターが寄贈され、没後には遺族から亀倉が収集した絵画、彫刻等約280点が寄贈されました。次いで2002年亀倉雄策資料室(東京)から、小型グラフィック、ポスターやマークに関するスケッチ、プレゼンテーション資料、ネオンサインやパッケージの写真や書簡、執筆原稿などの大量の資料が一括寄贈されました。また、書籍、図録、雑誌等は株式会社リクルートに寄贈されました。従って、亀倉雄策資料室が、亀倉雄策に関わる窓口となって連絡調整業務を行い、リクルートが設立した「亀倉雄策文庫」と新潟県立近代美術館が、調査・保存・公開を行うことになりました。(現在亀倉文庫は非公開) また、亀倉雄策賞の運営は亀倉資料室とJAGDA(日本グラフィックデザイナー協会)が行い、作品は毎年当館に寄贈されています。このように複数の組織が相互に協力して作品や資料、図書の活用を図り、次の世代に伝えていくことは、日本のグラフィックデザインを牽引してきた亀倉の遺志を継ぐことになると考えています。現在資料の調査を宇都宮市美術館、ギンザ・グラフィック・ギャラリーと行い、今後各館でテーマや展示内容を変えて展覧会を行います。

当館での展示では、第1部で生前にはあまり紹介されることがなかった戦前の仕事やミリオンテックス以前の作品や資料を紹介し、亀倉の仕事は、サン・テグジュベリの「夜間飛行」(第一書房)の装丁が始まります。その後日本工房に入社、「NIPPON」やタイ向けの宣伝誌「カウパブ」のアートディレクションを手がけたことは広く知られていますが、婦人画報の表紙や目次のデザインや特集ページの編集を行っています。戦後は、小型のポスター制作や雑誌の装丁に始まり、ミリオンテックスにつながっていきます。第2部では、戦後のデザイン制作の軌跡を「亀倉とオリンピック」、「亀倉とニコン」、「亀倉とCI」、「亀倉とスキー」、「亀倉と建築」、「亀倉とクリエイション」などのテーマで紹介し、残された豊富な資料は制作の背景だけでなく、新たな亀倉雄策像を浮かび上がらせることでしよう。

(学芸課長代理 宮崎俊英)

■展示室1・2・3の観覧料でご覧いただけます。

○今後の亀倉雄策展

- ギンザ・グラフィック・ギャラリー(銀座)
亀倉雄策展 1915-1997
2006年1月11日(初)～31日(火)
- 宇都宮市美術館
離陸 着陸 亀倉雄策のデザイン
2007年1月～3月



サン・テグジュベリ「夜間飛行」1934年



「カウパブ」・タウンオーク(東宝画報) 1939年



新作布地発表会のポスター 1958年

○万代島美術館情報

- 名画でたどる 日本画100年のきらめき (9月10日～10月23日)
- みんなのともだち 「こどものとも」の絵本 (12月23日～2006年2月12日)
- ユートピアを探しに 想像力の彼方へ (10月29日～12月11日)
- 7人の新潟の洋画家たち (2006年2月18日～3月31日)

The Niigata **Bandajima** Art Museum
新潟県立万代島美術館
〒950-0078 新潟市万代島5-1
(本館メッセ内 万代島ビル5F)
TEL:025-250-6655 FAX:025-249-7577
ホームページ www.lanet.gr.jp/banbi/

前回は願成就院と淨楽寺の諸像を工房製作の観点から比較し、当時の運慶工房はまだ手が揃っていないことがに及びました。今回はその後の運慶工房の歩みを見ます。

運慶工房の次の群像遺品は金剛峯寺の八大童子像です。建久8年(1197)に供養された八体のうち六体が残っています。中で持錫童子像がもっともすぐれ、運慶その人の手を感じさせます。制吒迦・慧光の二童子も立派なできで、耳を見ると運慶その人とは思えない彫刻として遜色がない。他の三体はちょっと落ちるようです。要するに弟子の数人はかなり伸びてきたという段階です。

この前年、運慶を含む父康慶の一門は東大寺大仏殿の脇侍菩薩、高さ約9mに及ぶ観音と虚空蔵、続いて高さ13mの四天王像を造りました。観音は快慶と定覚(運慶の弟か)が、虚空蔵は康慶と運慶が、小仏師八十人を率いて約七十日間で、四天王の方は同じ四人が一体ずつを分担して、恐らく同じ小仏師を率いて約百日間で完成させています。この時期、運慶・快慶・定覚のベテラン仏師を擁して康慶工房はもっとも充実したといえるでしょう。康慶は間もなく亡くなったようで、その工房は運慶が引き継ぎます。なおこの四天王像について、藤原定家はその四尺の雛型を見たこと、それを拡大してこの巨像を造ることを、その日記『明月記』に記しています。東大寺南大門二王像の造り方を考える上で参考になります。

岡崎市滝山寺の聖観音・梵天・帝釈天像は『滝山寺縁起』によれば正治2年(1200)に運慶・湛慶が造ったもので、それぞれがみごとなできです。建仁3年(1203)の東大寺南大門二王像は銘文や奉籠經の記すところによれば、阿形像が運慶と快慶、吽形像は定覚と湛慶が大仏師となり、小仏師を率いて約三十日間で彫上げました。そこに多くのすぐれた手が揃っていたことは誰もが認めるところでしょう。運慶五十歳前後のころです。

興福寺北円堂の諸像は運慶が総大仏師となって建暦2年(1212)に完成しました。運慶が六十歳前後の仕事です。一門の仏師たちが九体の像を造ったのですが、いま残る中尊弥勒仏の台座銘文によると、弥勒仏は源慶と静慶、脇侍菩薩の一体は運覚(他の一体は不明)、四天王は東(持国)・南(増長)・西(広目)・北(多聞)の順に湛慶・康慶・康弁・康勝、世親・無着はそれぞれ運賢・運助が頭仏師として分担しました。このうち源慶・静慶は寿永2年(1183)の運慶願經に結縁者として名を連らね、爾来三十年余にわたって運慶と仕事を共にしてきた、一門中最

古参の仏師です。脇侍担当の運覚もこれに次ぐ老練仏師のようです。湛慶は運慶の長男で建暦2年に四十歳。湛慶以下の仏師はいずれも運慶の子息で、ここに名を挙げた順が年長順です(ちなみに四天王像は東南西北の順に格が上の仏師から担当するのがふつうでした)。湛慶はこの時法眼位に上っており、二・三・四男も法橋位にあります。五男・六男はまだ若手の新説とあってよいでしょう。この北円堂造像では、運慶一門の長老仏師が健在であり、老練・中堅、さらに新鋭の仏師まで勢揃いしているのを見ることができます。現在北円堂に残るのは長老仏師による弥勒仏像、若手による世親・無着の三体ですが、いずれもみごとな作で、運慶その人の情想をあますところなく実現したものと思われ、いま失われた老練・中堅の仏師の手になる像にも同様のことを考えてよさそうです(四天王はいま南円堂の像がそれに当るとする説がありますが、まだ検討を要します)。古参・中堅・若手を含めすべてが運慶の意図を体し、彫刻技術が高い水準に昇った、いわば全く手が揃った幸福な時期、運慶工房の最盛期をこの北円堂造像に見てよいでしょう。



興福寺北円堂弥勒仏像

2005年4月～8月

県民の美の財産Ⅲ

作品をひもとく

4/23(土)～6/5(日)



資料や解説「手紙」で作家や作品のさまざまな側面を紹介。時間をかけて鑑賞していただく来場者が多かったようです。

ワークショップ



5/30日、自由につくろう
ゴールデン・ウィークで
訪れた親子連れの皆様が
ペーパークラフトを楽し
みました。



8/14日 「大きな字を書いてみよう！」
講師：内山王臣氏（書家）
地間に敷いた大きな紙に思う存分字を書きました。貴重な経験になった
ことでしょう。

重要文化財指定二十五年・県指定文化財五十一年記念

良寛遺墨展 — 御三家を中心に —

7/16(土)～8/21(日)



個人所蔵の方々、博物館等のご協力により、80余点の良寛遺墨を一堂に展示。まさに「一期一会」
の貴重な機会となりました。



7/31日 講演会「良寛書の魅力—展
示作品を中心に—」
講師：加藤浩一氏（全国読書会副会長）



8/7日 講演会「良寛書の楽しい解
い方」
講師：内山和也氏（筑波大学名誉教授）



7/23日 「てまりづくりに挑戦！」
きれいな糸でががる「てまり」の作り方を和泉村の久住さん、大矢さん、
見附市の山内さんが教えて下さいました。

研究室より ― 仏像調査進行中

当館では、昨年からは県内で仏像調査を始めています。近代美術館で仏像？と思われるかもしれませんが、5頁「美術雑筆」や、飄々とした語り口の美術史連続講座でおなじみ、仏像研究の第一人者、水野敬三館長が団長です。

これまで、およそ70の所蔵先にお邪魔しました。県内には古くは6世紀から、平安・鎌倉時代にかけて制作された優れた仏像があり、中央からもたらされたものだけでなく、地方らしい素朴な造形性を備えたものも魅力的です。山あいの集落で老夫婦が大切に保管している仏像をそっと拝見させていただいたり、時代の定まっていなかった仏像が、今回、天平時代の木心乾漆像であると判明したりと、語り尽くせぬエピソードがあります。加茂と糸魚川に別々に伝わっている、同年同日に制作された仏像も見えました。

当館では今、西洋美術、近代美術だけでなく、もっと新潟の郷土性に着目した展示会を考えてゆこうとしています。仏像の調査についても、近々その成果をご報告できれば幸いです。

(美術学芸員 長嶋圭哉)

※仏像を含め、県内にある国・県・市町村指定の文化財については、新潟県生涯学習情報提供サービスラ・ラ・ネット(<http://www.lalalnet.gr.jp/>)で検索できます。



調査の様子(糸魚川にて)

所蔵品展示報告「ザ・すわる！」ノートより

〈展示室3〉では4月から6月まで「すわっている人」や「すわる行為」をテーマとした小展示を行いました。タイトルは「ザ・すわる!」。主題に添った絵や彫刻を展示したほか、小さな畳のコーナー(ちゃぶ台&座布団付き)やベンチ、床に直接すわるためのクッションなどを置き、鑑賞者自身も坐って鑑賞できるようにしました。展示されている絵の高さも、坐っている人の視線を考慮して、いつもより低く設定しました。さて、ちゃぶ台の上のノートに残された皆さんのつぶやきに、ちょっと耳を傾けてみましょうか… (主任学芸員 佐々木奈美子)



〈畳コーナー〉と安宅系縁(五月の頃)・深澤幸一の版画

- ▼すてきな奥様の前に正座して鑑賞でき、とても落ちついた気持ちになりました。静かな雰囲気の中でまたお逢いたい気持ちです。次回はここで抹茶でもさしあげたい。
- ▼この絵の人は うちのおばあちゃんに似ているんですよ
- ▼最後に見た部屋が「お好きなところにお座りください」とのことで、一段上がったこのテーブルで孫と一緒に座りました。ほんとうにありがとうございました。
- ▼質問です。「ザ」は「座」にかけてあるんですか? (←よく気が付きました)
- ▼美術館の中で 今 自分が座っているなんて 不思議です。とても新鮮で斬新です。

ひもとく展を終えて

～ひもといたのは
作品だけではなかった～

鑑賞者の視点に立って様々な工夫が凝らされた「作品をひもとく」展(左頁参照)。しかし、それは鑑賞者の皆さんばかりではなく、迎える側の学芸員個々、美術館全体のためにも大いに意義のあるものとなりました。

学芸員全員で分担して作成した解説パネル、そして解説パネルなどをもとに考え出したクイズ、これらは「調査・研究」と「教育・普及」という美術館の2つの役割をつなぎ一体化させました。

「鑑賞者の視点に立つ」という共通の目的が、美術館のあるべき一つの姿について、ひもといた。」そんなふうにも捉えられる展示会だったのではないのでしょうか。

(主任学芸員 丸山 実)



5/8日 クイズ「楽しく覚えてあなたもコレクション通り」

イベント情報

9月～3月

●企画展

- 9/3(土)～10/23日 「ケーテ・コルヴィッツ展―未来の種たちへ―」
 (関連イベント)
 9/24(土) 公演「朗読美術館 ケーテ・コルヴィッツ」
 出演：たかべしげこ ヴィオラによる伴奏付 無料
 9/4日、10/9日 映画「リュックブリック(回顧)」
 出演：アミキ・ダンス・シアター・カンパニー (ビデオ上映) 無料
- 11/3(木・祝)～12/11日 「昭和の美術 1945年まで―(目的芸術)の軌跡」
 (関連イベント)
 11/23(水・祝) 講演会「『美の帝国』の夢―ナチス・デザインと『新体制』日本」
 講師：長田謙一氏 (千葉大学教授)
- 2006年1/28(土)～3/21(火・祝) 「離陸 着陸 亀倉雄策のデザイン」
 (関連イベント)
 会期中に解説会・講演会を予定

●所蔵品展示

- 第3期 9/27(火)～12/25日
 前期：11/13日まで 後期：11/15(火)から
 展示室1：事件です！(前期・後期で一部展示替え)
 展示室2：中越の作家たち
 展示室3：特集
 エルンスト・バルラッハ(前期)
 版画に表された戦争
 ～カロー・ゴヤ・グロス(後期)



エルンスト・バルラッハ
 (ロシアの恋人たち)
 1908年(1940年経過)
 ※9/27～11/13

- 第4期 2006年1/4(火)～3/26日
 前期：2/12日まで 後期：2/14(火)から
 展示室1：麻田廣司と横山操
 展示室2：描かれた雪
 (前期・後期で一部展示替え)
 展示室3：もう一つの亀倉雄策展



横山 操(高速号線) 1964年
 ※1/4～3/26

●巡回ミュージアム

- 会期中無休/無料
 10/26(木) 魚沼市立瀧之谷中学校
 10/29(土)～11/ 3(木・祝) 五泉市総合会館
 11/ 5(土)～11/13(日) 上越市三和スポーツセンター

●ワークショップ

- 無料/各日曜 ※申込の有無についてはお問い合わせ下さい。
 「びじゅつ☆体験隊」 11/ 6 ときめき☆ファッション
 「発見!びじゅつかん」 9/18 め・い・ろな 美術館 第4回
 2/ 5 雪の中の野外彫刻めぐり

●館長による美術史連続講座

- 無料/講堂/各土曜 14:00～
 9/ 3 「定朝以前―和様彫刻への道」
 10/15 「定朝―和様彫刻の完成」
 11/ 5 「定朝以後―院政期の彫刻」
 水野敬三郎(当館館長)



当館館長 水野敬三郎

●作家による美術鑑賞講座

- 無料/講堂/各土曜 14:00～
 10/ 1 「印象派の空間意識―スライドで訪ねる印象派の空間(奥行き感)―」
 鈴木 力氏(画家・一陽会委員)
 10/22 「絵画の横写」山本真也氏(画家・新潟大学教授)

●美術鑑賞講座

- 無料/講堂/各土曜 14:00～(※を除く)
 9/10 「ケーテ・コルヴィッツ―人と生涯―」
 佐々木奈美子(当館主任学芸員)
 9/17 「音楽・コルヴィッツの時代 1910-40 レコード・コンサート
 1910年代から1940年代の音楽を聴く」※10:00～16:00
 小見秀男(当館学芸課長)
 10/29 「西洋美術史を彩る女性画家たち」
 今井 有(当館主任学芸員)
 11/19 「昭和初期の〈目的芸術〉」
 澤田佳三(当館主任学芸員)
 11/26 「『日本神話』はどう描かれたか」
 長嶋圭哉(当館美術学芸員)
 12/ 3 「明暗法の秘密を探る」
 平石昌子(当館主任学芸員)
 1/28 「欲望のオブジェ モダン・デザインの変遷」
 丸山 実(当館主任学芸員)
 2/25 「亀倉雄策 戦前・戦中・戦後のデザイン」
 宮崎俊英(当館学芸課長代理)



奥山藤八郎(左様海立)
 1928年頃
 松戸市教育委員会蔵
 (昭和の美術展より)

●映画鑑賞会

- 無料/講堂/各土曜
 10/ 8 ドイツ映画「クーレ・ワンペ」
 11/12 戦争と映画(上映作品未定)
 12/10 アート・ドキュメンタリー「ボルタンスキーを探して」
 「C・ボルタンスキーについて彼らが思い出すこと」
 1/14 アート・ドキュメンタリー「音のない世界で」
 2/11 アート・ドキュメンタリー「レベッカ・ホルン」
 3/11 巨匠の名画(上映作品未定)

ショップ&レストラン おすすめの一品

クリスタルガラス
 カードスタンド
 (6色)
 ……各483円(税込)



※ポストカードは
 別売りです。

ミュージアムショップ 三越
 TEL.0258-28-4411

平日☆日替り
 ランチ
 ……720円(税込)



※数には限りがありま
 す。写真はメニュー
 の一例です。

レストラン・喫茶 広告塔
 TEL.0258-29-5001

利用案内

■開館時間/午前9:00～午後5:00

- ※観覧者の混雑は午後4:30まで
- レストラン/午前10:00～午後5:00
- ※ラストオーダー(食事) 午後4:00
 (飲物) 午後4:30
- ミュージアムショップ/午前9:00～午後5:00

■休館日/毎週月曜日

- ※ただし月曜が祝日の場合は閉館し、翌日休館。
- ※11/7(土)、21(日)、12/5(日)は閉館。
- ※12/26(日)～1/3(火)、3/27(日)～3/31(日)の各期間は休館。

■観覧料金

- 企画展
 企画展によって観覧料が異なります。
 なお、企画展の観覧券で、展示室1・2・3もご覧いただけます。
- 展示室1・2・3
 ●一般/410円(330円)
 ●中等教育(後期)・高校・高等専門・大学/200円(180円)
 ※学生証を提示してください。
 ●小学・中学・中等教育(前期)/100円(80円)
 ※()内は20名以上の団体料金です。
 ※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。

新潟県立近代美術館だより 雷橋通信 第25号

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
 編集・発行 新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市宮町字原町278-14 TEL.0258-28-4111(内) FAX.0258-28-4115
 http://www.kalanet.gr.jp/kinbi/ e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社 中央印刷(〒940-0041 長岡市学校町1-9-21 TEL.0258-35-3500)

発行日 平成17年9月1日